

人形の河庄



●十月●

初一日

初日午後二時開幕

十月の文楽

「非常時日本に處す力強き精神は先づ我等の郷土藝術を
八ヶ月振に合同出演の握手興行

菅原傳授手習鑑 車場の段より
老巧土佐太夫の櫻丸切腹に若手錚々の大活躍

ににしの糸の妹山脊山

たがいの中も吉野川

ここに結びて花いかだ

津太夫の大判事古朝太夫の定高興味深き名人の掛合

小春 心中天網島 北新地
治兵衛 河庄の段

朗らかに握手した津と古朝が毎日替りの熱演

三十三間堂棟由來 掛合

精緻の手をこらして蕩酔させる親子の愛

●初日の割引値
一等椅子席二、〇〇〇
二等席一、〇〇〇
三等席〇、五〇〇

●二日目よりの料金
一等椅子席三、〇〇〇
二等席一、五〇〇
三等席〇、八〇〇

一等席(指定券)
前賣切符

五日前より發賣
電南 4711番

毎日三時開幕の
人形淨るり綱出演
文楽座

義太夫 恩愛・柳の精

後八・ 卅三間堂棟由來
 三〇 平太郎住家の段

北面の武士横曾根光督 となつて一子、緑丸を 牟禮すべし」との靈夢の子、平太郎は熊野權 生んだ、一方都では後 現に詣でた際、山中の 白河法皇の御惱重く、 柳の大木が鷹狩の人々 ある夜「御前生の體懷 によつて伐り倒されよる、その體懷を求め、 となつた「平太郎住家の 柳の難を救うたが、柳 その柳の大木を以て棟 段」はこの離別を寫し 美人と化し平太郎の妻 堂を御建立あらば忽ち た物語である

淨るり 竹本叶太夫
 三味線 鶴澤友造
 ツレ弾 鶴澤友太郎

お柳は平太郎と縁丸とが腰についたを幸ひに、ひそかに別れを告げ立去らうとするが平太郎は夢うつつにお柳の述懐を耳にして起上り引止めたが、折からの風につれ伐木の音丁々と聞え来るので、お柳はこれまでなりと後白河法皇御前生の體懷を夫に渡し、これを手柄

に出世あれといひ残りて姿を消す平太郎は縁丸を連れ、あとを慕うて柳の本へ――
 その留守に和田四郎が強盜に押入り佛壇の體懷を奪はんとして、支へる老婆を池中へ投込む、折柄立歸つた平太郎はこの有様に驚き、母を救ひ上げて蘇生させる、再び和田四郎が現れ、奪へる體懷の因縁を詰問する、平太郎は母の仇を報いんとすれども夜盲のことゝて



意の如くならず、詮方なく涙にくれてお柳を呼び體懷を祈ると忽ち兩眼明かとなり難なく和田四郎を討取る
 けども押せども一寸も動かかなかつたが平太郎と縁丸が出て體懷を取ると不思議や苦もなく動き出す、平太郎は木遣音頭をうたつて引いて行く

——(來由棟堂間三卅) 柳お精の柳——

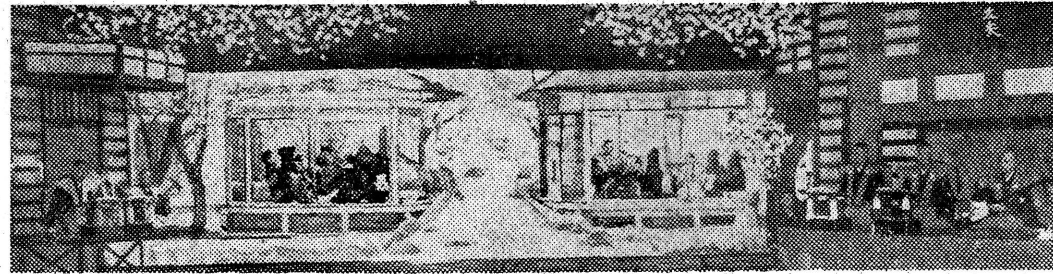
義太夫隨喜の一篇 文樂座より中繼

津、古靱兩太夫

掛合で熱演

〔自七時半〕妹背山婦女庭訓 至九時半

山の段の場景 櫻花
瀧川の吉野川を挟んで妹山
背山の両床



「妹背山婦女庭訓」は明和八年正月に書脚されたもので作者は近松半二、松田はく、榮善平、近松泉用で三好松洛が後見となつてゐる。全五段から成立つてゐるがこんどの「山の段」は恰度三段目の切で結構の雄大趣向の奇妙、章句の優麗な點に於ては淨曲中隨一である。出演者メンバは所謂紋下問題の解決を機として津、古靱兩師の握手的熱演で稀に見る豪華な顔觸れであることは秋の一夜の聴き逃せないものである。

輿車ならぬ爪琴で

首のお輿入り

放送は山の段

大判事 竹本 津太夫
久我之助 豊竹つばめ太夫

三味線 鶴澤 綱造
同 豊澤 仙糸
定 高 豊竹 古靱太夫

雛鳥 竹本 南部太夫
三味線 鶴澤 友次郎
同 野澤 吉彌
琴 鶴澤 福木郎

【解説】王朝時代の入鹿の暴政を背景にしたもので、武士の意地づくから、紀州背山の領主大判事清澄と、大和妹山の領主太宰の少将國人の後室定高とが國境の吉野川を境にして互に反目して軋轢をつづけてゐたが、清澄の仲久我之助は何時しか國人の遺子の雛鳥と相思の仲となつてゐた。處で當時國政を自由にしてゐた蘇我の入鹿は其權勢を恃んで雛鳥を後宮に迎へやうとし、其手段として久我之助に難題を言ひかけて自滅させると、雛鳥も人内を拒んで、久我之助に操を立て、母の手にかゝつて蕾の花をちらすといふ狂言で、親達の心も解け合ひ雛鳥の首が形見の爪琴に乗せられて吉野川の川瀬を渡つて久我之助の許へ輿入れするところなど固有藝術の獨壇上で、淨ろりは元より歌舞伎でも兩床を使つて掛合で演ずる。

◇ ◇ (前略) 入鹿大臣へ差上たる雛鳥が首、御極使受取り下されと、呼はる聲を吹き送る、風の案内に大判事、歎きの姿改めて、衣

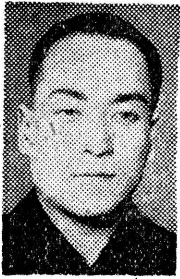
豊竹つばめ太夫ひん



豊竹 古靱太夫さん



竹本 津太夫さん



竹本南部太夫さん

紋纏うひ徐々と、下立つ河邊の柳腰。娘の首を搔抱き。大判事様、別して何にも申しませぬ御子息の御命は何卒と思ふた效もない、敢ない有様、お前様の。お心も、推量致して居ります。添ふに添はれぬ眼線を、想ひ合ふたが互の因果、此方の娘も、そひたいと思ひしに。◎余り不惑に存じます、せめて久我之助殿の息のある中に此の首を其方へ渡し申すが、娘を嫁入さす心。實に尤、嫁は大和、聲は紀の國妹背の川の中に落つる吉野の川の水盃、櫻の林の大鳥籠。目出たう祝言さしませうわい、それなら是迄の心も解けて◎ハチ互にあひやけ同士。エ、忝ないと悦ぶも後の祭、ほんに背丈延びたる首を、何時迄も、子供の様に思ふて暮すは親の例、甘やかした雛の道具、一人子を殺して何にせう、跡におく程の涙の種。侍女共一式、残らず川へ流れ瀧頂、未來へ送